



上智大学創立 100周年
上智短期大学創立 40周年
上智社会福祉専門学校 50周年



上智大学の女子学生

No. 39

1. 創設当初は男子校だった

上智大学は現在、女子学生に人気が高く、女子学生の比率は学部で56%（2014年5月1日現在）と男子学生数を上回り、四谷キャンパスは華やかな雰囲気が漂っている。大学ランキングでは女子アナウンサーの出身校として高い位置を占めるなど、女子学生が活躍できる大学として知られている。理工学部の女子学生の割合も高く、「リケジョ」と呼ばれる理系女子の知性と美貌を競う「ミス理系コンテスト」で2013年に優勝したのは上智大生だった。

しかし、100年の歴史を振り返ると、創設当初から44年間は男子校で、四谷キャンパスには黒い詰襟の男子たちが闊歩していたのである。



女子学生が多く華やかな現在の四谷キャンパス

2. 男子校に女子学生が編入学 ー創設から44年後

戦後、日本の多くの大学が共学に移行する中、上智大学は、防衛大学校を除く主要大学の中で最後まで残された男子校であった。他方、世界のカトリック大学に目を向けると、男女別の大学が主流で、本学の経営母体であるイエズス会（男子修道会）が運営する大学も男子校であった。20世紀前半、カトリック指導者の間では社会における男女の役割には違いがあるので将来の役割にふさわしい教育をすべきだという考えが支配的で、大学の運営母体となっていた修道会も男女別の組織であった。

そのような中、内外の事情の変化とともに共学の必要性が認められ、1956年12月の理事会で、翌年4月から女子学生を専門課程（3・4年次）に入学させることを決定した。このことは、学生新聞「上智大学新聞」（1956年12月1日付）の1面に「女子入学を認む一本学の教育に革命」という見出しで記事が掲載された。上智大学が女子学生の入学を認めることは、本学のみならずカトリック系高等教育機関にとっても革命的なことであった。（他方、1949年に開設された国際部には女子が入学していた。）

1957年4月、白百合女子短期大学を修了した4人の女子学生が本学に編入学すると、上智大学新聞（1957年5月15日付）では、「女子学生がみた上智」と題して、3人の女子学生の座談会を掲載。女子学生たちは「他家にお客にきた感じ」、「上智の学生は紳士だって伺っていたんですが、ほんとうでした。とつても静かで上品です（笑）」と語り、教員については、「とてもいいにくそうな態度をなさるため、かえって、教室の空気が不自然になります。いままで通り、女の子を意識しないで講義なさった方が自然でいいのじゃないかしら」と述べていた。1958年からは1年次の入学を認めた。

3. 男女共学になるまでの道のり —志願者減少を受けて

本学はなぜ男女共学というカトリック大学としては画期的な決断をしたのか。

女子学生を受け入れた当時、後にイエズス会総長となるペドロ・アルペ神父はイエズス会日本管区長に就任し、本学と深く関わるようになった。クラウス・ルーメル神父が『上智大学史資料集 補遺』(1993年)に記したアルペ神父のエピソードによると、「1952年までは、募集定員240名のところ約800数十名の志願者があったが、53年以降志願者は500数十名と減少し、師はそのことを憂慮された」と記している。志願者減少の解決策としてアルペ、大泉、ルーメルの3神父が立てた5カ年計画に男女共学が含まれていた。

1957年10月、2学部合同の教授会にて、「大泉学長がいきなり『日本には女子大学は数多く存在するが、男子のみの大学は上智大学だけである。そろそろ本学も男女共学に踏み切ってよいのではないだろうか』と提案した」とルーメル神父は記している(『愛はとこしえに—大泉先生の思い出集—』、1988年)。共学の問題点を指摘する教授も多く、「積極的に賛成した者は皆無であった」が、大泉学長は「それでは消極的な意味で、男女共学を採用することにする」といい切り、イエズス会本部(ローマ)の総長からも「やむを得ないであろう」と賛同を得たというエピソードも同著に残っている。

4. 女子学生の支援から男女参画推進へ

女子学生を受け入れると、大学は次第に支援体制を整えていき、1960年には女子寮を建設し、1962年には女子学生相談室を開設した。この相談室には、画家・有島生馬(作家・有島武朗の弟)の長女、有島暁子が女子学生指導部長に就任し相談相手となるほか、フランス育ちの経験を生かして社交的なマナーも教えた。こうして、女子学生を大学に溶け込ませる努力が行われたのである。

女子に門戸を開くやいなや、女子学生数は急速に増加した。1960年代半ばには学生全体の3分の1は女子学生となり、1998年以降は女子学生数が男子学生数を上回った。女子学生も一流企業に入社するなど、上智大学全体の評価は高まっていった。

また保健体育や語学を始め、女性教員も採用されるようになった。女子学生受け入れと同年に創設した文学部外国語学科ロシア語専攻(現ロシア語学科)で創設時から教鞭を取っていた講師 Galina Podstavina 氏は、「ロシア語学科のシンボルみたいなロシア人の女の先生」と言われていた(『25年の歩み: 上智大学外国語学部ロシア語学科』1982年)。著名な社会学者、鶴見和子氏は1969年に創設した国際関係研究所の教授に就任し、上智大初の女性教授となった。理工学部では1973年に岡崎幸子氏が化学科の教授となり、緒方貞子氏は、1973年と1980年に国際関係研究所の教授に就任し、1989年に本学初の女性学部長



女子学生相談室(右が有島暁子氏)



授業風景(1959年)

となった。緒方氏はその後、国連高等難民弁務官に就任するなど、世界的に活躍していった。

近年、本学は理工学部を中心に男女共同参画を進めている。2009 年度文部科学省女性研究者支援モデル事業に採択され、2009 年から 3 年間にわたり「グローバル社会に対応する女性研究者支援」プロジェクトを推進。海外の女性研究者をメンターとして受け入れ、理工系の女性研究者の増員や、非常勤講師、リサーチ・アシスタントの雇用など支援体制を整えた。こうした取り組みは、文科省の総合評価で、私立大学初となる最高評価（S 評価）を取得した（2013 年）。

そのような努力も貢献して、『2014 年版大学ランキング』（朝日新聞出版、2013 年）で上智大学は、理工学部の女子学生の比率で第 5 位（23.8%）となった。女性アナウンサーの出身大学としては第 4 位、女性社長(社員 10 人以上)の出身大学としては 12 位であった。最初の抵抗を乗り越えて女子学生を受け入れたのは、大学の前進に役立ったようである。